３．長井市の歴史 ～ 水と緑と花のながい ～

祝瓶山と木地山ダム湖

長井の「井」は水の集まる所。この地名の由来が示すように、朝日山系を源とする置賜野川、飯豊山系を源とする置賜白川、そして、吾妻山系を源として市の南北を貫流する最上川の3つの河川がまちを囲むように流れています。

この地域には、旧石器時代や縄文の時代から人々が住んでいたことが数多くの遺跡から分かっています。

長者屋敷遺跡

土偶広場

４本柱（春分の日の出）

三淵（みふち）

特に、長者屋敷遺跡では、4本の柱で構成される半截木柱（はんさいもくちゅう）遺構が発見されました。柱列と太陽の動きから四季を読み取ったと思われ、縄文人の英知が伺えます。

蝦夷の地とよばれた古代東北にも律令制が及びます。長井地方は優嗜曇評（うきたむこおり）とよばれ陸奥国に含まれていましたが、その後、山形・秋田県域で出羽国が設置され置賜郡となります。東北の経営拠点となる城柵（じょうさく）を中心に開拓が進み、北陸・信濃・上野から移民も配置されました。巨四王神社や諏訪神社などは移住者たちが故郷の守神を祀った名残りといわれています。

平安中期から鎌倉時代にかけて、道の奥といわれた東北の開拓が進み、平泉藤原文化の下で大きく飛躍しました。

千年ほど前、源頼義が戦勝祝いに軍士に獅子舞をさせました。それが伝統神事となり、市内の約 40 の神社で黒獅子舞が奉納されています。獅子舞には、野川上流の秘境、三淵（みふち）に身を投じた卯の花姫が竜神となって總宮神社の例大祭に招かれ、野川を下って雨を降らせるという言い伝えがあります。源氏に敗れた安倍氏の娘、卯の花姫の悲恋伝説、水の恵みへの感謝、豪雨で暴れ川と化す野川への畏敬の念、五穀豊穣、無病息災を願う人々の連綿とした祈りとともに黒獅子が舞います。

鎌倉御家人だった大江時広が鎌倉前期に長井庄の地頭となって置賜一円を治めますが、時広はその名を冠して長井時広と名乗りました。源氏の氏神である八幡神社が数多く現存するのも、鎌倉御家人の統治がこの地に及んだ何よりの証拠といえます。

宮村は、總宮神社の門前町として、小出村は大須賀氏の白山館を中心に早くから栄えました。天授 6 年（1380 年）、伊達氏が長井の領主となります。

黒獅子まつり

小桜館（旧郡役所）

伊達時代には真言宗を中心として仏教が栄え、名僧・宥日（ゆうにち）が現れ、多くの仏像が彫られ庶民の信仰を集めました。今、「小桜館」と呼ばれている宮村館は、伊達の家臣片倉伊賀守・壱岐守の居館で、北の最上氏、鮎貝氏の押さえとして大切な役目を果たしました。

天正 18 年（1590 年）に伊達氏が秀吉によって仙台に移封され、長井は蒲生氏郷・上杉景勝と支配者がめまぐるしく変わりました。

上杉時代の長井は、最上川の歴史と共にあったといえましょう。元禄 7 年（1694 年）に西村久左衛門によって舟運が開かれ、酒田を経て遠く京・大坂との通商が行われるようになると、長井の舟場は米沢藩の物資運搬の起点、商取引の町として繁栄を極め、絹織物・反物などを取り扱う多くの豪商が現れ、栄華を誇りました。蘭学医・長沼牛翁をはじめ多くの文人が生まれ、天下の墨客が長井を訪れ、文化の華がきらびやかに開いたのも文化・文政の頃です。

やませ蔵

舟運は、フラワー長井線の元となる軽便鉄道が開通（大正 3 年（1914 年））する頃まで 200 年以上にわたって続きましたが、今も、数々の建造物が往時の繁栄を伝えています。

丸大扇屋

山清は、江戸期より呉服太物・古手を扱い、明治以降は紬織りの改良に携わり長井紬の基礎を築きました。敷地内には水路が走り、江戸期以降の土蔵が点在して風情ある佇まいになっており、現在は「やませ蔵美術館」として公開されています。

フラワー長井線

丸大扇屋は、今から300年前に呉服屋を営んだ商家で、茅葺屋根の母家と蔵座敷、水と緑が織りなす庭園、それぞれが美しく調和し、最上川舟運の繁栄をしのばせます。敷地内には丸大扇屋で生まれた彫刻家 故 長沼孝三氏（長井市名誉市民）の彫塑館もあり、清新な人間愛、慈愛を表現した作品が展示されており、小桜館とともに「文教の杜」を形成しています。

締切堤防遺構

さらに、国の登録有形文化財（建造物）に指定されている鍋屋本店、長沼酒造、齋藤家住宅、丸や芳賀醤油店、山一醤油店、旧丸中横仲商店蔵群なども市内に点在し、華やかな時代の息吹を感じ取ることができます。

水の歴史は治水の歴史でもあります。特に、宝暦 7 年（1757 年）の洪水は、野川の堤防決壊と松川・白川の大洪水によって、市内全域が空前の被害を受けました。その後も洪水が再来し、中道地区は農民が逃散して無人になったとの記録もあります。幕府は米沢藩の願いに応

え、明和 6 年(1769 年)、締切築堤奉行・加納久右衛門を派遣して締切堤防を完成させました。この堤防は明治 36 年の大水で決壊しますが、その間、132 年にわたり、平山・九野本・宮・小出の 4 ヵ村を守りました。

平山の村民は久右衛門の人望と功績を敬い、彼の槍の穂先を神宝にして水天宮を造立しました。度重なる洪水から村を救った久右衛門を神と崇めた村民の畏敬の念が、強く感じられます。

明治 4 年(1872 年)の廃藩置県の後、米沢県、置賜県、山形県とあわただしく行政改革が行われ、明治 11 年(1879 年)に郡制が施行されると、西置賜郡に属することになりました(豊田村の一部と伊佐沢村を除く)。

明治 22 年(1890 年)の町村制では 21 の旧村が合併し、長井町・長井村・西根村・平野村・豊田村・伊佐沢村の 1 町 5 ヶ村となりました。

長井町の年間予算に匹敵する経費を費やして誘致した東芝長井工場が本格操業したのは、昭和 17 年(1942 年)です。その後、東芝の企業城下町として電気機器関連産業が発展しました。豊富できれいな水が誘致に大きな役割を果たしました。市内には今も梅花藻が咲く水路が多く残され、「水のまち」を象徴しています。

そして昭和 29 年 11 月 15 日、町村合併推進法により 1 町 5 ヶ村が合併し、総面積 214.67km^2 の「長井市」が誕生しました。高度経済成長に伴う近代産業の伸展とともに工場が建ち、製造業の技術の集積、農業や商業活動も旺盛になって長井市は飛躍的に発展し、社会資本の整備とともに生活水準も向上しました。

長井市は「花のまち」です。百年の歴史と物語に彩られた「あやめ公園」には、百万本のあやめと 30 数種の「長井古種」が咲き誇ります。「白つつじ公園」では、樹齢 750 年余の「七兵衛ツツジ」など 3 千株のリュウキュウツツジが、辺りを白銀に染めます。

樹齢約 1,200 年といわれる国指定天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」には坂上田村麻呂の伝説が、さらに、草岡の大明神ザクラ(国指定天然記念物)、ハギなど、美しい花々と数々の物語があふれています。

長井市の総面積の約 60%は山林です。20 世紀中頃まで、人々は大きな山の恵みを受けて日々の営みを続けてきました。

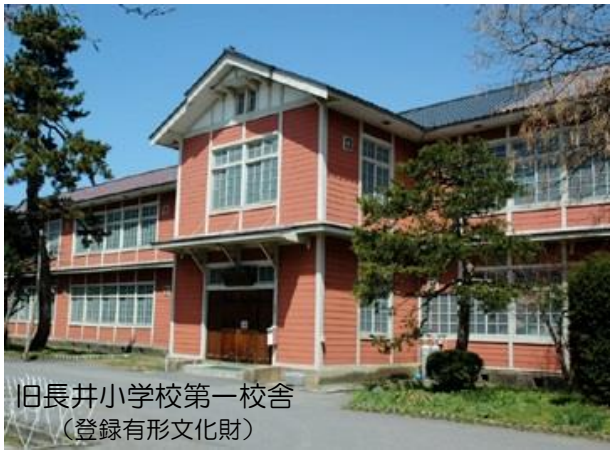
その感謝の思いは、平成元年の「不伐の森条例」制定

レインボー野菜（菜なポート南店）

にも表れていますが、同じ頃、台所と農業をつなぐ「レインボープラン」の構想が生まれ、平成 9 年にはコンポストセンターが稼働しました。緑と環境を守り循環型社会の構築を目指すこの事業は、世界中の注目を集めました。ブナの新芽で新緑に染まる葉山の峰々は、「緑のまちながい」に春を告げます。

平成 26 年、長井市は、まちの将来像を「みんなで創る しあわせに暮らせるまち 長井」とする第五次総合計画を策定しました。

翌 27 年には、「教育・子育て」を軸に、交流・雇用の好循環を目指す「まち・ひと・しごと創生 総合戦略」を策定するとともに、シティコンセプトを「天然水 100%の子育てライフ ながい」としました。長井の水道水は、朝日山系の山々でろ過された地下水です。しかも軟水で体にやさしいことが「水のまちながい」ならではの大きな魅力です。


旧長井小学校第一校舎
（登録有形文化財）

平成 28 年、観光の産業化を目指して「やまがた長井観光局」が設立され、29 年には道の駅「川のみなと長井」がオープンしました。

また、平成 30 年 2 月には、「最上川上流域における長井の町場景観」が国の重要文化的景観に選定されました。長井の町場に大きな発展をもたらした最上川と舟運文化の香りが残る「宮」・「小出」の中心区域の町並みが景観の国宝に選ばれ、長井の魅力が大きくランクアップしました。

長井の町場景観（長井橋上空から）

これらの資源を磨き、教育や子育て推進をはじめとした魅力ある施策を展開しながら、しあわせに暮らせるまちづくりが進められています。

道の駅「川のみなと長井」のにぎわい